

今どきの高校生の語彙力

〈国語力向上事業研究・語彙力調査から〉

●筑波大学附属高等学校教諭

鎌倉芳信

(かまくら・よしのぶ)

春床一刻値千金——意味(春、起、き、る、前、の、布、団)の中の一瞬は千金もの値打ちがある。

三省堂『新編国語総合』に名文として紹介されているものを、後に試験した際の解答。なるほど、である。もともと文系の大学生でもこんな答はけっこう多いらしいから、高校生の勉強不足ばかりを嘆くわけにもいかない。生徒に「春宵」の実感がないのである。だから、「春の夜は まだ宵ながら、明けぬるを 雲のいずこに 月やどるらむ」(百人一首)の歌、「宵ながら」の意味の解答に、「まだ夜なのに」「まだ暗いのに」という答が圧倒的に多いのだろう。日暮れから夜中までを「宵」という時間意識は今の高校生から完全に消え失せている。

こうした状況をたびたび味わうものだから、国語科で生徒の語彙力調査をしてみた。以下は調査の結果の簡単な紹介である。

語彙は、「漢語」「和語」「カタカナ語」「諺・慣用句・四字熟語」の四分野から。調査は、「読めるか」「意味がわかるか」「正しい使われ方がわかるか」「語彙を選択できるか」「適切に表現できるか」の五項目。

○「未曾有」「風聞」「焦眉」など死語に近い
けっして特殊なことばではない。「未曾有の大惨事」など「未曾有」はよく聞くことば。先のスマトラ沖地震の報道でもこのことばを多く耳にし目にした。しかし単語では読めない。読めないということは正確に意味を理解していないということ、大惨事のニュースを生徒はどう理解していたのだろうか。

「風聞」にしても、「風聞に惑わされなくて」などと使うが、果たして生徒はこうした惑いに陥ったことなどないのだろうか。

「焦眉」にいたっては、40%の者しか読めない。「焦眉の急」となればあるいはもっと正答率が上がるかも知れないが、「焦眉の急」の意味を理解しているかどうかは不安。

○和語は大の苦手

「なおざり」「したり顔」「かこつ」「おしなべて」「うらぶれた」「つとに」「やつす」「うがつ」など、意味や使われ方が理解できている生徒は半分以下。「なおざりな」を「ざつくばらんに」と混同したり、「したり顔」を「えびす顔」と同じ意味に理解したりする。「かこつ」はもつとも正答率が悪がったが、「不満をぶちまける」の意味で理解している者が多数。「かこつ」の響きには「ぶちまける」に通じるものがあるのだろうか。

和語を使つての表現となるとその能力は格段に落ちる。「たそがれ」を「しょんぼりしている」の意味で理解しているのだろうか。「悲しい気持ちで、彼はたそがれていた。」とか「やがて夕日が沈み僕はたそがれるのをやめた。」など、理解に苦しむような誤用は多い。しかし、「空はたそがれ色に染まっていった」となると、果たして誤用と言えるかどうか悩むところだ。「たしなみ」では、「私は、たしなみを整え、入学式に参加した。」「私は、たしなみをするのが大好きです。」「私は、彼のあまにひどい行動をたしなんだ。」「たしなめる」との混同と思われる。)などという誤用が多い。

意味をきちんと理解せず、ただ語の響きや語感からの

イメージでことばをとらえていることに起因する間違いがほとんど。和語は日本の伝統的な美観や美意識に根ざしているものだけに、残していかなければならない。しかし、調査結果を見ると、国語の指導上組織的に工夫し取り組まないと将来たいへんな事態になっているのではないかと危惧される。

○カタカナ語は好き

「アイテム」「モチベーション」「フェミニズム」「ネガティブ」「イベント」「ニーズ」「リスク」等、カタカナ語は意味・使い方・それを使った表現ともよくできる。和語と比較すると驚くほどの違いがあり、生徒の日常生活の一端がうかがえる。生徒はカタカナ語をかなり自由に抵抗なく使いこなし、コミュニケーションの重要な要素としているようだ。しかし、それは日常生活のレベルでのこと。国語力という観点からすると喜んでばかりいられない面もある。意味の正答率が60%から80%と、あまりよくないカタカナ語をあげると、「コンセンサス」「インフォームドコンセント」「バリエーション」「エゴイズム」「グローバル」など。

注意したいのは、これらのカタカナ語は、必要な術語であつたり、読解・思考には欠かせない語であつたりす

ることだ。こうした語が生徒に十分に浸透していない事実は深刻だ。「エゴイズム」の意味が理解されていないとすれば、『羅生門』は果たして理解できるのであろうか。まして漱石の小説を読むことなど絶望的ということになる。「ジェンダー」(58%)「レトリック」(59%)に至っては60%以下の正答率である。

○諺・慣用句・四字熟語には指導の成果が

この分野の理解力・使用能力は他の分野に比べて比較的高い。これは小学校時代からの学習の成果だろう。それゆえ、出来のよくなかったものだけをあげてみると、「お茶をにごす」「けんもほろろ」「足元を見られる」「鼻持ちならない」など。「鼻持ちならない」(28%)の理解は三割以下の正答率。当然この語句を使つての表現は出来ない。「今年の花粉は鼻持ちならないらしい。」など笑つてしまう答案もある。小学校で同時期、同形式で小学生向けに行つた調査では、「顔にどろをぬる」を「あまりのくやしさに友達の顔にどろをぬる」とか、「板につく」を「(かれ)の板について歩いていこう」(4年)などという、笑えない珍答があった。どちらも、ことばを表面的にのみとらえ、背後の意味をまったく理解していないものだ。諺や慣用句などは、いったんそのことばの

なりたちを含めて理解させれば定着するものなので、何をどこでどう確実に教えるかであろう。

漢語の慣用句になるとおぼつかないものが増える。「老婆心」の意味を「やさしい心」と捉える者が24%いる。したがつて、この語を使った表現では「『彼の幼稚な行動に対して』老婆心がくすぐられた」のような答が多い。また、「破天荒」は「とんだ破天荒の日の出発となつてしまった」を正しい使い方とした者が29%もいる。「雪辱」を使った表現で「雪辱をはらす」と書いた者は64%。「雪辱を果たす」のように、ひと続きの慣用表現として理解定着させる必要があるだろう。

○大人の常識は生徒の非常識

以上、調査の一端を紹介したが、私たち大人にとつては常識と思われることも生徒にとつてはけつして常識ではない。「社会の教科書の文章が難しい」と言う生徒はけつこう多いと聞く。先述の小学校の調査では「エチケツト」を知らない児童が多数いた。古文の「現代語訳」を普通に「日本語訳」と言う高校生だから、語彙の指導は私たちにとつて当然の言語感覚が通用しないと見て注意深くしなければならぬと思う。(文部科学省指定の筑波大附属小中高国語科「国語力向上事業研究」から)